山崎郷土研究会
NO. 141
令和5.8.26
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

戦争の遺跡　忠魂碑について（二）

大谷司郎

はじめに

前号に引き続き、各地区の忠魂碑を記録としてまとめておきたいとの思いから、今回は北部三町の状況を各地区の遺族会の方や、自治会役員等への聞き取りをもとに掲載させていただくこととする。

忠魂碑の当初建設時期の自治体でいうと、一宮町域では神戸村、染河内村、下三方村、三方村、繁盛村の五ヶ村。波賀町域では西谷村、奥谷村の二ヶ村。千種町域では千種村一ヶ村の合計八ヶ村となる。その多くが各村の小学校敷地やその近くに建立している。小学校も含め、国を上げて戦争を美化してきた象徴として、身近に忠魂碑があったといえる。

一宮町・波賀町・千種町の忠魂碑の状況

前号で触れた宍粟市遺族会が忠魂碑の現況調査をし、一冊にまとめた「平成二十四年度宍粟市内忠魂碑等現況調査」（宍粟市社会福祉協議会保管）をベースにして各地区の状況の収集を試みた。

目次

戦争の遺跡　忠魂碑について（二）……大谷司郎　1
地域遺産としての「文化財」を保全するには
「文化財保存活用計画」の策定にあたって住民の視点で……志水豊章　6
船元一雲寺の喚鐘……片山昭悟　9
ぶらりふるさと地名考……竹内克司　14
山崎闇斎先生の神道について……髙井淳　18
会員・家族の文芸……21
令和五・六年度役員紹介、事務局だより・編集後記……22

◇神戸地区……『神戸小学校創立百周年記念誌・向上』によると、当初の建立は大正十年（一九二一）に閏賀河原とあり、その後学校敷地が東市場へ移転するのに伴い忠魂碑も移設され、その両度とも記念の除幕式が行われて、学校行事として全児童が参加した記事が残っている。

時は移り、染河内小学校との合併が決まった平成二十九年（二〇一七）十二月、「はりま一宮小学校」開校に伴い、忠魂碑は撤去された。現在は忠魂碑の下部にはめ込まれていた建設の経過が刻まれている石碑文のみが残され、はりま一宮小学校の運動場に面したコンクリート壁面にはめ込まれている。

◇染河内地区……染河内小学校の運動場の一角に昭和五年（一九三〇）忠魂碑が建立された。

近年になると遺族会員の高齢化と世代交代で碑の前では祭祀も行

一宮町、波賀町、千種町忠魂碑設置状況一覧

地区名	石碑名称 戦死者等人数	設置場所	設置年月日	設置者	揮毫者	参考事項
神戸	忠魂碑 289	一宮町東市場はりま一宮小学校壁面に記念碑文のみ残る	大正10.10.22 関賀河原に建立、除幕式 昭和4.10.12関賀から東市場に移転し、除幕式	在郷軍人会神戸分会	陸軍少将 伊豆凡夫	終戦後一時解体、昭和28年5月復元、再建 平成29年12月はりま一宮小学校開校時に撤去される。
染河内	忠魂碑 59	一宮町能倉 旧染河内小学校敷地内 (現在撤去)	昭和5年11月建立	帝国在郷軍人会染河内分会	陸軍大将 一戸兵衛	平成30年6月兵庫県立森林大学校設置に伴い撤去される。
下三方	忠魂碑 134	一宮町福知抜山	昭和3年11月建設　昭和51年の山津波で流出、昭和56年4月傷ついた碑を再建	帝国在郷軍人会下三方分会	陸軍大将 一戸兵衛	陸軍歩兵中佐(後中将) 田路朝一が裏面に揮毫 明願寺、大徳寺、安楽寺が順番で慰霊祭のお参りを実施（『ふるさと福知』）
三方	忠魂碑 150	一宮町森添 御形神社参道脇	昭和9年5月10日に忠魂社の近くにあった碑を移転建設	帝国在郷軍人会三方分会	陸軍中将 安東貞美	揮毫者の階級から見て大正4年以前に建立されたと思われる。三方小沿革誌に大正9年3月忠魂碑に参拝の記事あり。(移設時記念写真有) 御形神社境内に忠魂社あり、三方谷3ヶ村の396柱が祀ってある。
繁盛	忠魂碑 112	一宮町上岸田 (旧繁盛小学校の国道向い側)	昭和9年11月建立	帝国在郷軍人会繁盛分会	陸軍大将 鈴木荘六	繁盛小沿革誌に昭和9年11月26日忠魂碑除幕式に職員児童参列すとあり。
波賀	忠魂碑 (西谷村) 204	波賀町上野 波賀文化創造センター駐車場内	波賀小学校にあった碑を平成13年3月現在地に移設	帝国在郷軍人会西谷村分会	陸軍大将 板垣征四郎	当初は昭和14年3月安賀の西谷小学校運動場西北に設立戦後解体されたが、昭和28年４月同場所に再建。
	忠魂碑 (奥谷村) 93		平成16年3月長源寺内の奥谷村の碑を撤去して合祀	帝国在郷軍人会奥谷分会		当初は旧引原小学校に建立。戦後解体されたが、昭和29年頃長源寺境内に再建。
千種	忠魂碑 305	千種町千草 大森神社敷地内	大正9年11月	帝国在郷軍人会千種分会	元帥陸軍大将 川村景明	忠魂碑脇に副碑あり、建設篤志者名が刻まれている。敷草宮に戦没者が祀ってある。

一宮・波賀・千種町内の忠魂碑

神戸地区忠魂碑（宍粟市遺族会現況調査提供）

染河内地区忠魂碑（宍粟市遺族会現況調査提供）

下三方地区忠魂碑

三方地区忠魂碑

繁盛地区忠魂碑

波賀地区忠魂碑

千種地区忠魂碑

三方地区忠魂碑（移設時＝御形神社提供）

われていないとのこと。同校が神戸小学校との合併で平成三十年（二〇一八）三月に廃校となり、同年六月、跡地が兵庫県立森林大学校に移管された。同大学が設置されるに伴い、地域の関係者が協議の結果、忠魂碑は撤去された。

◇**下三方地区**……昭和三年（一九二八）福知の抜山に日清戦争以降の戦没者が祀られた忠魂碑が建立された。

下三方小学校沿革誌によると昭和二年の項に「忠魂碑建設奉仕作業」とあり、また翌三年の項にも「忠魂碑建設奉仕」の記載が見える。教員か児童が建設の奉仕作業に参加したことが伺える。

昭和五十一年（一九七六）九月、台風一七号により下三方小学校を含む抜山の地に大規模な地滑りが起き、山津波となって学校や民家、忠魂碑も含めて流失する大災害が発生した。復旧のさなか、河川の土砂に埋もれて二つに割れた忠魂碑が発見され、復興の印としても再建したいという地域住民の総意で災害から五年後の同五十六年（一九八一）四月に抜山の地に再建された。（『ふるさと福知』抜粋）

◇**三方地区**……現在は御形神社の参道脇に建立されている。忠魂碑の裏面の銅板に現在地への移設年月日や移設に携わった団体や個人名が刻まれている。それによると移設は昭和九年（一九三四）五月とある。

移設前はどこにあったのかについては、昭和五年（一九三〇）に発行された『三方の光』に興味深い絵図がある。それは「式内・縣社御形神社御境内図」で、同神社の建物の配置図の中に忠魂社横に忠魂碑が載っている。境内地にあった忠魂碑を現在地に移設したという記録が御形神社社務所日記の昭和九年の項に次のようにあった。

「当社境内ニ有之候忠魂碑ヲ鳥居前ノ原野ニ移転ニ付（以下略）」と五月十日「忠魂碑移転除幕式挙行ス（以下略）」とあり、銅板に刻まれている竣工日と一致する。この社務所日記が移設前の所在を裏付けている。ただ同境内図に「寺内大将書忠魂碑」とあり、参道脇の揮毫者と違うことから、何かの経緯があったと思われる。

次に当初の建立は何時かについて考えると、揮毫者「陸軍中将安東貞美」とあることから、氏は大正四年（一九一五）に大将になっているので、少なくともそれ以前の建立と考えられる。

三方小学校沿革誌を見ると、大正九年（一九二〇）の項に「三月十日陸軍記念日ニ付午前十時ヨリ忠魂碑ニ参拝シ碑前ニ於テ訓話シ（以下略）」とあり、大正九年には忠魂碑があったことを裏づけている。

なお、御形神社には忠魂社が建っており、三方谷三ヶ村の戦没者三九六人がお祀りしてある。進藤千秋宮司には社務所日記や写真提供のほか、旧村別の戦没者数も教示いただいた。

◇**繁盛地区**……繁盛小学校の国道向い側に建立されている。忠魂碑の裏面に「昭和九年拾壹月建立」と刻んである。繁盛小学校沿革誌を一宮北小学校校長先生の許可を得て拝見させていただく（下三方小学校・三方小学校沿革誌も同様）と、昭和九年（一九三四）の項に「十一月廿六日忠魂碑除幕式職員児童参拝、寄付職員三十円、児

童五円」とあり、建立年月を裏付けている。

忠魂碑の裏手銘板石に昭和二十八年（一九五三）五月とあり、他の忠魂碑にも共通していることだが、終戦の昭和二十年に進駐軍の命令で忠魂碑の撤去が進んだ。ほとぼりが冷めた始めた二十年代の終わり頃に再建された例があちこちにみられる。繁盛地区も同様かと思われる。その碑には古く「西南ノ役」の戦没者名や「日露ノ役」の戦没者名が刻んである。

◇**波賀地区**……西谷村、奥谷村の両忠魂碑が平成十六年（二〇〇四）に合祀され、波賀市民局上の波賀文化創造センター駐車場南に設置されている。

▽**西谷村**……昭和十四年（一九三九）西谷小学校運動場の西北に建立された。終戦後、一時解体されていたが、昭和二十八年（一九五三）四月、同場所に再建された。平成十三年（二〇〇一）三月に現在の波賀文化創造センター駐車場の一角に移設された。奥谷村との合祀はその三年後となる。

▽**奥谷村**……当初は引原小学校校庭に建立されていた（建設年不詳）。終戦後一時解体されていたが、昭和二十九年（一九五四）頃、引原ダム建設に伴い、長源寺境内に再建された。波賀町の合併から時を経て両村の忠魂碑が平成十六年三月に一つになった。

◇**千種地区**……大森神社の敷地内にある忠魂碑は、大正九年（一九二〇）十一月に建立されたと碑に刻んである。忠魂碑脇に副碑があり、建設篤志者三百人に余る名が刻んである。

大森神社の境内社に敷草宮があり、千種町出身の戦没者の霊舎となっている。春名勉宮司からの聞き取りでは、戦没者三〇五人、満蒙開拓団四五人の計三五〇人がお祀りしてあるという。

また、千種町岩野辺の二宮神社境内に「表忠碑」が建っている。忠魂碑ほど大きくないが、表忠、つまり忠義を表すの意味で、日露戦争以降の戦没者を表忠する碑であるという。揮毫者が陸軍中将尾野実信で、後に陸軍大将になっている人物である。

おわりに

前号と二回にわたり宍粟市内の忠魂碑の集成を試みたが、不十分な集約になっていることは否めない。大正・昭和期に忠魂碑を通して、戦没者の霊を慰めるとともに、戦意を高揚する地域の象徴として存在していた歴史を振り返る一助となれば幸いである。拙稿にあたり、宍粟市遺族会会長東豊俊様、神戸分会長植田恒夫様、波賀分会長谷尻博美様、はりま一宮小学校、一宮北小学校、御形神社進藤千秋宮司様、大森神社春名勉宮司様、宍粟市社会福祉協議会ほか多くの方にご指導ご協力いただき感謝いたします。

【参考文献】
『神戸小学校創立百周年記念誌・向上』同校記念事業推進委員会・平成七年九月
『一宮町史』一宮町史編集委員会・昭和六十年三月
『ふるさと福知』一宮町福知・平成六年三月
『三方の光』宍粟市歴史資料館・平成二十六年二月

地域遺産としての「文化財」を保全するには

「文化財保存活用計画」の策定にあたって住民の視点で

志水豊章

宍粟という地域を理解するために

「宍粟」は難読地名の代表のように言われる。私も学生時代に「穴粟郡」と呼ばれ、宍道湖の「宍」と粟ではなく「粟」であると訂正していた。その面積は淡路島より大きく、琵琶湖よりも小さいと言われている。

地名はその土地・地域の歴史であり、固有の「足跡」体現した象徴であると思っている。明治二二年の市町村制が施行されて作られた「村名」であってもしかりである。フランスのように数字を打って行政区とした明治初期の「大区小区制」は定着しなかった。小学校の統廃合で旧村名が消滅していくのは一抹の寂しさを感じるが、それにかわるものが欲しい。地名が消滅するのは、たとえ一五〇年前に創られた地名だったとしても、その地域に培われてきた生活・文化なりが、空間的基盤を支えたシンボルに思えるのである。

高等学校に入学したとき、郡域から集まった同級生の話す言葉遣い、特に語尾とアクセントの多様さにカルチャーショックを覚えた。その時の感想は、豊かな方言が空間的な地域ではなく、揖保川や引原川、千種川などの本流筋とその支流筋の違いになんとなく気付き、鯉や鮒などの魚ではなく、川底に潜むあまり移動しない目立たない魚類の名前を持ち寄って話し合ったことがあった。魚の名前も方言と同じで、本流筋と谷筋は異なっていた。宍粟の多様性は、古来よりこの土地が持っていた文化というか共有部分に揖保川を遡ってきた新たな生活文化が普及したが、郡域を覆いつくすことなく現在に至ったのだと、当時も考えていた。

その当時は、中国道のルートはようやく路線のセンター標柱が建てられ建設地が目視できるようになって、神戸新聞などは山崎断層帯を通る自動車道を「銅鐸の道」と称して報道していた。安志峠には今はなくなってしまった横ずれ断層特有の古墳と間違うばかりの丸い丘（ケルンバット）が点々と連なり、山の尾根筋は三角形をした斜面が連なっていた。「銅鐸の道」は、千種から運ばれる「鉄の道」をも連想され、揖保川は高瀬舟だけでなく、北部の豊富な材木を網干に運ぶ筏流など河川交通もことかかなかった。また、国道二九号沿いだけが「出雲街道」「因幡道」ではなかった。河川に沿った南北道とは別に、郡北から北の美作・因幡、或は但馬地方へ通じる峠道は何本もの東西交通網を形作っていた。現に幕末の「生野の変」に敗れた勤王浪士は冨士野峠を越えて山崎の手前まで逃げてきている。

「播磨国風土記」によると宍粟郡は揖保川流域の揖保郡から分離されて、立郡され里が置かれた。また、平安から鎌倉期には京都の社寺の荘園とされた。ところが、鎌倉期の承久の変によって、関東の御家人が新補地頭として一族をあげて複数の武士団が宍粟に移住してきており、新たな京文化や関東武者の習俗が流入してきたことだろう。浄土教の普及は千草に痕跡を残すが、海岸部に定着した浄土真宗は南部地域に限られ、北部は瑠璃寺に代表される真言系寺院

が分布し、千種の美作県境にまたがる後山修験道場の行場群が未調査のまま眠っている。

文化財保存活用計画とは

宍粟市教育委員会は今年度より学術経験者を交えた「文化財保存活用地域計画協議会」を組織し、三カ年計画で策定する計画が立てられている。

この活用計画は文化庁の地域文化創生本部「広域文化・まちづくりグループ」が提唱しているもので、趣旨は「地域の歴史や文化を踏まえて、多様な文化財を俯瞰し、地域の特徴をいかした、文化財の保存と活用を図る」と謳う市町村のアクション・プランです。策定する具体的な事項は、

(1) 文化財の保存及び活用に関する基本的な方針
(2) 文化財の保存及び活用を図るために市町村が講ずる措置の内容
(3) 文化財を把握するための調査に関する事項
(4) 計画期間
(5) その他文科省令で定める計画の名称、事務の実施体制　等

となっています。その計画は「市町村における文化財の保存と活用に関する総合的な法定計画であり、地域の実情を踏まえた独自性のある計画策定」を趣旨とし、①中長期的な方針や具体的な事業の可視化、②地域に所在する文化的な所産の把握、③国庫補助事業における補助率の加算などの優遇が作成メリットとして揚げられています。

文化庁作成のマニアルでは、①自然的、地理的環境　②社会的状況　③歴史的背景を「市町村の特徴」として捉え、歴史文化の特徴を抽出して、関連文化財群や文化財保存活用区域を設定して、

(1) 文化財の保存と活用に関する措置
(2) 関連文化財群・文化財保存活用区域の措置
(3) 文化財の保存と活用の推進体制
(4) 特例措置として国の登録文化財への登録提案、文化財保護法の一部事務について権限移譲

都道府県を通じて申請し、文化庁長官の認定を受けるというものです。

「策定指針」が対象としている文化財とは、①有形文化財　②無形文化財　③民俗文化財　④記念物　⑤文化的景観　⑥伝統的建造物群の六つの類型が想定されている。

その文化財とは、「保護法」の目的である「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民〔ここでは「市民」である住民の意〕の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献する」と述べながら、文化財が有形・無形の多種多様な文化的所産から成り立っており、取扱いに細心の注意を要するものや、社会の中で適切に活用されることで継承されるものもあり、「保存」と「活用」を図ることが次世代への継承に繋がるものであると強調している。

そして、その「文化財」は国・県・市の指定文化財であるとは明記されていない。すなわち、私たちが日常に目にし、生活している身の周りの風景に「歴史風土」という価値を見出して、その一部に保全すべきものとして史跡や樹木などの天然記念物であったり、歴史的建物やその景観を含む多種多様な「地域の遺産」を「文化財」といって呼び変えてもいいのではないだろうか。

宍粟市の文化財の継承についての課題

市域の指定文化財は、国指定の「御形神社本殿」、地域を定めない「オオサンショウウオ」、登録の「中門前屋主屋」の三件、県指定は天然記念物を中心に二一件と登録が二件、市指定は九二件に及ぶ。チャンチャコ踊りや獅子舞、農村舞台社叢林、古木・大木、群生地などに交じって「与位の洞門」や滝が三件もある。所有が社寺や自治会、保存会など多様ではあるが、地域社会に支えられて保存・管理され、伝承されている物件がほとんどである。

つまり、宍粟市の急激な人口減少は山間部からしだいに、自治会の統廃合が目前にせまり、「文化財保存活用地域計画」の維持・保存・活用の母体が消滅や弱体化が進行している。地域に伝承されてきた行事・祭礼、年中行事が維持できなくなっている。集落から家屋が消えるだけでなく、社寺やその地に残されてきた古文書類や祭礼道具、民具の類、はては、住んでいた人々の写真や記録は、廃村とともに記憶のかなたに忘却されていくだろう。かつて栄えた鉄山やその村下たちの集落と同じように、樹海に飲込まれ忘れられて、人々が営んだ生活の痕跡や記録も失われてしまうのではないだろうか。現に、旧村単位で建てられた「忠魂碑」や「小学校」ですら例外ではなくなっている。

弱体化する集落単位の自治会では保全・維持は困難なことは確実である。行政の積極的な記録保存に請うしかない段階に至っているのではないだろうか。

「文化財保存活用地域計画」に望む事柄

宍粟市の中心部には「兵庫県景観形成等に関する条例」に指定されている「宍粟市山崎町山崎地区歴史的景観形成地区」がある。近世城下町の町並み景観の保全を図る市街地景観である。これは、現在も住み続けながら積極的に景観の維持を図りながら住環境と歴史的景観を調和させようとするものである。ちなみに市の担当課は建設部都市整備課である。

これとは別に昨年一〇月に策定された「日本一の風景街道の創造宍粟市風景ビジョン」がある。これは、「宍粟市総合計画」「宍粟市地域創生総合計画」の景観保全を目的とした個別計画で市の各個別計画から景観の視点で整合性が図られた計画である。風景を「暮らし」の中で捉え、「風景の骨格として生活の基盤ともなっている自然環境の保全と再生を図り、調和のとれた穏やかな風景づくり」を地域の個性と捉えています。担当課は市長公室地域創生課です。

地域資源であるべき「文化財」を観光資源として活用する視点ではなく、住民目線の「文化」と「自然」の遺産を宍粟の未来を担う子どもたちに継承していく方策を、地域遺産が保全活用できる「地域社会の生き残り戦略」として個別計画を策定していただきたい。

最後に、この地域計画を策定される協議会の学識経験者の先生方にお願いしたい。それは、いつのまにか「奥播磨」と称されて、西播磨地域から切り離されつつある「宍粟の風土」をどう理解し、さまざまな地域遺産の普遍性を生活の場に意味づけ、宍粟に住み続ける市民に「住み続ける」ことの誇りを回復させる「文化運動」の出発点となる提言を期待したい。そして、宍粟に住み続けることの「自負心」を取り戻したい。

船元一雲寺の喚鐘

片山昭悟

はじめに

宍粟市金谷に在住した鋳物師長谷川氏の梵鐘については、これまで『山崎郷土研究会報』に寄稿させていただいています。

山崎には長谷川氏作の梵鐘や喚鐘（半鐘とも）が多く現存しています。

その中で山崎町船元の一雲寺（浄土宗の大雲寺の末寺）が廃寺の手続きをされることを大雲寺住職加藤昭彦氏よりお聞きしたことからこれまで城下地区にあり、幾度も現地調査をしていたが、今、一度見聞したいと思い訪れました。

ところがこれまで玄関の右上にあった釣鐘はすでに降ろされていて、見ることができなかったのでまことに残念に思いました。

これまで私の記録をもとにこの度、概要につきて紹介させていただきます。

写真１　一雲寺

一雲寺喚鐘の計測

総高　五十三センチ
鐘身　四十センチ
口径　三十センチ
乳　三段三列
双龍（宝珠）
撞座　複弁八葉
草の間　桐文（五三）と菊文と唐草の文様
江戸時代
寛政元年（一七八九）酉暦十月九日
冶工　當郡住　長谷川孫兵衛藤原義則

写真２　一雲寺喚鐘

船元庵半鐘銘　池の間（陰刻）

一区
諸行無常
是生滅法
生滅々已
寂滅為楽
二区
惣施主十方旦那
船元庵常什物也
願主宍粟郡舟元村
舩（船）元庵現住華藏隠
三区
干時 寛政元年　酉暦
十月九日
冶工　當郡住
長谷川孫兵衛
藤原義則
四区
一誉諦心居士
一切檀越信施受
小鐘為造立國寶
七拾銭目加之者也

一雲寺について

山崎町船元の浄土宗の一雲寺には、今から二三三年前の江戸時代の寛政元年（一七八九）に金屋村鋳物師長谷川孫兵衛(歴代襲名)の中でも藤原義則によって製作された現存する鐘です。なかでも優秀な作品です。城下地域でただひとつ現存する長谷川氏のものです。

『浄土宗兵庫教区寺院名鑑』によると、

「当寺の創建は詳らかでないが、讃譽林栖大徳が船元の地に三昧堂として庵を結び一雲庵と称した。

貞享年間（一六八四～一六八七）に入寂された記録があり、その後、信誉休夢大徳が住し庵と船元墓地の管理を行う。宝暦十二年（一七六二）入寂、以後無住となり船元の人々に依る管理が続いたが、性誉恵庵大徳が奥州仙台より縁あって当地に赴き堂宇を復興し、一雲庵の称号を公称し教化活動につとめ、明治十四年（一八八一）に入寂された。次いで一蓮社法誉上人本伝和尚が堂宇を修築、更に昭蓮社法譽上人憲貫和尚が昭和四十九年（一九七四）入寂されるまで念仏教化に当たられた。

昭和二十六年（一九五一）宗教法人法施行にあたり一雲寺と改め現在に至っております。」とあります。

現在は大雲寺住職が兼務されています。

一雲寺には桃山時代（十六世紀）とされる本尊の木造阿弥陀如来座像（四十六センチ）と持仏の閻魔大王座像があります。

一雲寺の鐘は長谷川氏の梵鐘を考える上で重要な鐘です。

梵鐘について

坪井良平『梵鐘』学生社によると、

「梵鐘はたんなる一個の金工品ではない。

それは黙して語らないが、その一つ一つが秘められた過去をもっている。それは篤心者の心願により作られ、その製作には鋳物師とともに有縁の道俗が汗を流し、それが、懸げられてからは、寒暑風雨をいとわず朝夕うちならされた。過去の追憶から生まれて愛情をもって梵鐘に接してこそ、その過去を語りくれるのである。」船元庵喚鐘についても鐘銘にも江戸時代に多くの方々の浄財で造られて風雪に耐えて今に至っています。

おわりに

私が宍粟市の梵鐘調査をするきっかけは、船元の一雲寺の鐘をみてからで、四十年になります。

長谷川孫兵衛の中でも藤原義則は、宍粟郡で多くの梵鐘を鋳造しているが、中でも一雲寺の鐘は、技術的にも美術的にも最もすぐれたものです。とくに皇室にみられる桐文と菊文の文様が見えることからもそのことが窺えます。これらを考えます時、船元の地元で是非とも残してほしい貴重な鐘であります。

私は城下小学校のふるさと学習で一雲寺の釣り鐘を紹介させていただきました。年内に一雲寺は廃寺になります。

なんとか金谷の長谷川孫兵衛が造った江戸時代の一雲寺の鐘を地元の船元で残してほしいとの思いから、私の気持ちをひとりでも伝えられたらと今回特別に紹介させていただきました。

長谷川孫兵衛藤原義則の梵鐘鐘集成（存否）

①天明二年（一七八二）の佐用町慶雲寺の梵鐘（否）
　冶工　當國宍粟郡金屋村住
　長谷川孫兵衛尉藤原義則作

②天明三年（一七八三）の下牧谷大倭物代主神社の梵鐘（否）
　冶工　金屋村邑住
　長谷川孫兵衛尉藤原義則作（再鋳）

③天明六年（一七八六）の波賀町安賀の満願寺の半鐘　（現存）
　冶工　當國當郡住
　長谷川氏藤原義則作

④寛政元年（一七八九）酉暦十月九日船元一雲寺の半鐘（現存）
　冶工　當郡住
　長谷川孫兵衛藤原義則

⑤寛政四年（一七九二）の一宮町伊和の神福寺の梵鐘（否）
　鋳工　同郡金屋住
　長谷川孫兵衛藤原義則

⑥寛政六年（一七九四）の千種町千草長永寺の梵鐘（否）
　勅許　御鋳物師　當郡金屋之住
　長谷川孫兵衛藤原義則

⑦寛政九年（一七八九）の小茅野の位尾神社の梵鐘（現存）
　當郡金屋村住
　勅許冶工 長谷川孫兵衛尉藤原義則（再鋳）

金谷の鋳物師長谷川氏について

金谷については、江戸時代の寛延二年（一七四九）の「播磨国細見図」に、金屋村と記載されている。「金谷」ではなく「金屋」となっている。金屋村は鋳物師の村につけられた名で、江戸時代には長谷川五郎兵衛と長谷川孫兵衛の二名が宍粟郡金屋村鋳物師として梵鐘や半鐘を製作していた。いつ頃から鋳物師が存在していたかは定かではないが、村内政雄「由緒鋳物師人名録」、『東京国立博物館紀要』七号昭和四十四年発行、ならびに笹本正治「近世真継家配下鋳物師人名録（二）」、『名古屋大学文学部研究論集』史学二九号昭和五十八年発行、によると、江戸時代の終わり頃の文政十一年（一八二八）～嘉永五年（一八五二）の『諸国鋳物師名寄記』などにみえる。また、江戸時代に全国の鋳物師を支配していた真継家より鋳物師の許可が発給されており、鋳物師に与えられた「鋳物師職許状」や郡唯一だされる「大工職許状」や仁安二年の蔵人所牒や天福元年の蔵人所牒の鋳物師にかかわる旧書の写しなどもみえることからも確認できる。

長谷川孫兵衛や長谷川五郎兵衛の名がみえるのは次のとおりである。

播磨国宍粟郡柏野庄金屋村　（宍粟市山崎町金谷）

長谷川孫兵衛

①名寄帳について

『諸国鋳物師名寄記』

文政十一年（一八二八）～嘉永五年（一八五二）

『諸国鋳物師姓名記』嘉永七年（一八五四）

『諸国鋳物師控帳』　文久元年（一八六一）

『禁裏諸司真継家名寄牒写し』文久元年（一八六一）

『由緒鋳物師人名録』明治十二年（一八七九）

②文書について

天福元年（一二三三）十一月　牒写

享保十二年（一七二七）　鋳物師職許状

明和八年　（一七七一）十一月鋳物師職許状

安永十年　（一七八一）二月　鋳物師職許状

天明三年　（一七八三）三月

鋳物師職許状・大工職許状

文政十二年（一八二九）三月　鋳物師職許状

長谷川五郎兵衛

①名寄帳について『諸国鋳物師名寄記』

文政十一年（一八二八）～嘉永五年（一八五二）

『諸国鋳物師姓名記』嘉永七年（一八五四）

『禁裏諸司真継家名寄牒写し』文久元年（一八六一）

②文書について

仁安二年（一一六七）　牒本紙

享保十二年（一七二七）　鋳物師職許状

享保二十年（一七三六）四月鋳物師職許状

宝暦七年（一七五六）十月　鋳物師職許状

明和八年（一七七一）十一月鋳物師職許状

安永十年（一七八一）二月　鋳物師職許状

天明三年（一七八三）三月
鋳物師職許状・大工職許状
寛政五年（一七九三）四月　（天福元年牒）
文政十二年（一八二九）三月鋳物師職許状

なお、享保十二年の鋳物師職許状、天明三年三月の鋳物師職許状・大工職許状は孫兵衛と五郎兵衛の連名状である。

また、越後鋳物師に伝わった『諸国鋳物師名前帳（安政四年写し）』や伊勢国桑名鋳物師中川家蔵本の『諸国鋳物師文化以前名前写し』にもみえるようである。

このように真継家の文書や名寄帳などにより江戸時代の享保から文政にかけて長谷川氏は播磨国宍粟郡金屋村鋳物師として、長谷川孫兵衛と長谷川五郎兵衛が活躍していたことが知られる。

長谷川氏は宍粟郡の大工職として、藤原姓を名乗っていたことが、山崎町はじめ宍粟市内の梵鐘、喚鐘などから窺える。

代表的な梵鐘は、江戸時代後期の宝暦十一年（一七六一）の桓武伊和神社の鐘、寛政九年（一七九七）再鋳の小茅野位尾神社の鐘、享和二年（一八〇二）の川戸道場元の喚鐘などが現存している。

写真3　一雲寺喚鐘（拡大）

桐文
撞座
菊文
浄土宗
一雲寺

ぶらりふるさと地名考「城下」

竹内克司

ここに一枚の古写真があります。これは明治から大正・昭和と山崎町が一望できる名所として多くの人々が訪れた最上山のお寺「最上稲荷山経王院」から城下方面を撮ったものです。中央下の山崎小学校の向こうには広い田園が広がっています。この田園は山崎町の穀倉地帯ともいうべき城下平野で、そこに点在した村々が城下村です。写真の撮られた明治三十七年から現在までの約百二十年に及ぶ町の移り変わりは、広々とした平野部の田畑や竹藪が大きく減少したことです。今回は、城下村（城下地区）の成り立ちやそれを構成する村々（現在の自治会）を地名由来や遺跡をもとに探ってみたいと思います。

古写真１　明治37年の城下平野

この写真は最上山のお寺から南に向かって撮られています。中央下に見えるのが山崎小学校の運動場です。中ほどに左右に延びる黒い帯筋は、主に菅野川の両岸に繁茂する竹藪です。菅野川は西から東に向かって揖保川に合流しています。

城下村の地名由来

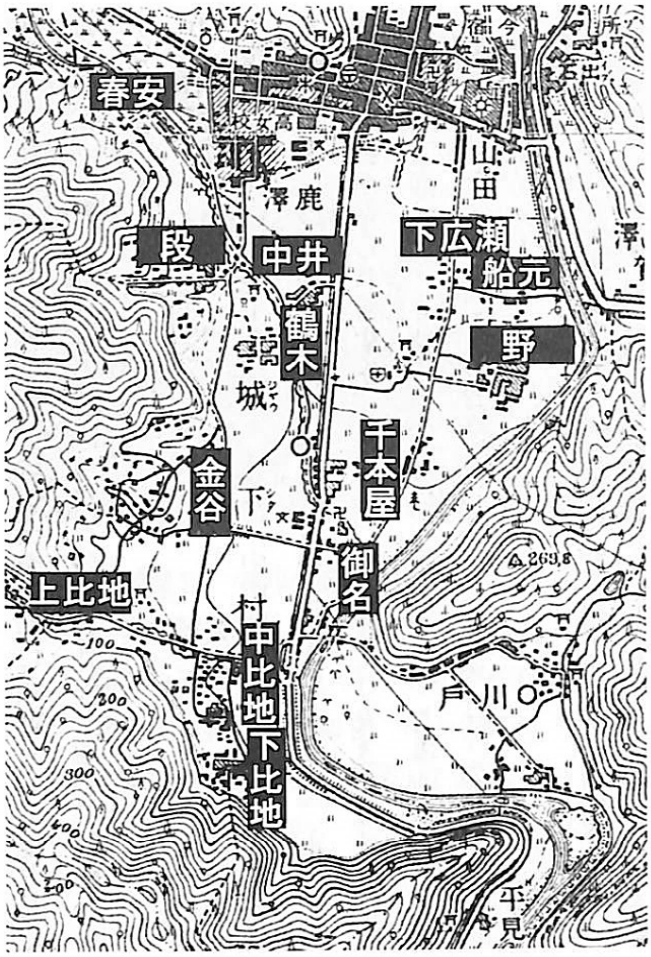
城下村は明治二二年（一八八九）から昭和三十年（一九五五）の宍粟郡の自治体名で、中井・鶴木・段・春安・下広瀬・船元・野・千本屋・御名・金谷・上比地・中比地・下比地の十三か村が合併して生まれました。村名は、江戸期に北隣の山崎地区の南端に領主の居城（陣屋）が置かれ、当地がその城の下にあたることによります。

明治七年（一八七四）全国に「廃城令」が発布されたのを機に、旧山崎藩士遠藤亘（わたる）氏が山崎町の発展のためにと、城郭の裏門側の石垣と土堤の一部を崩して城下村への新道路の建設を計画しました。その敷設の中心者の遠藤氏の名をとり、「遠藤坂」と呼ばれました。明治以降は、江戸期の揖保川高瀬舟による舟運に替わって、道路と車の時代に入り、この新道路は山崎の町場と龍野（現たつの市）を結ぶ唯一の産業道路となりました。

地名と遺跡で探る村々の歴史

1、中井（なかい）

城下平野の北端に位置し、県道山崎・新宮線と東西には中国自動車道によって四分されています。地内の田中神社を基点に条里制を示す泉ケ坪、柳ケ坪、子牛ケ坪の小字が残され、これらは「中井条里遺構」と呼ばれています。平成十五年（二〇〇三）の山崎町教育委員会の埋蔵文化財調査では、二千年前の弥生中期の田んぼの証の赤土が確認されています。ちなみに平成八年（一九九六）の調査で西鹿沢の総合病院の建っている場所に弥生の住居跡地が発見されています。高台に住居を構え、一段低い城下地域で揖保川から水を引き、水路（溝）を作り稲作を行っていたようです。中井の地名は今宿辺りに井堰を作り、途中で水路を枝分かれのように二股にしていて、水路の中ほどに井堰があったことにからと思われます。。



城下地区図（中央の道が明治の新道路）

2、鶴木（つるぎ）

揖保川支流菅野川の下流域にある。伝承によると、里人の井上左衛門が土中から剣を掘り出したことで、剣村と言われるようになったという。鶴木神社（金毘羅神社）には、それに関わる故事来歴を書いた古文書が残されています。里人は、剣は神の霊刀だとして大きな樹木の下に立て置くと、ある日鶴が飛来し立ち去らず、そこに仙人のような蒼い顔の白髪の老翁が訪れ、「私は剣の霊なり、今よりこの地に神殿を祀るべし」、と言い残して立ち去った。そうして、村人は霊剣を神としてお祀りし、それより村を鶴木と改めて、その社を鶴木神社と称するようになったとあります。

3、段（だん）

菅野川の下流域。地名の由来は、古い集落が段丘面に発達していることから一段高いところの村といわれる。天保十一年（一八四〇）に松井氏が鋳物師の権利を得て、仕事場を開設し、安政二年（一八五五）に大砲を鋳造している。地内の北東部に犬ノ馬場の小字が残っています。観音堂には伝説を物語る絵馬があります。

4、春安（はるやす）

菅野川の中流域に位置し、集落は国見山の北麓周辺に集散。元和元年（一六一五）池田輝澄が宍粟藩主となり、池田家祈願寺の天台宗中寺円明院「円明寺」を建立し、延宝七年（一六七九）本多忠英が山崎藩主となり、吉祥山願行寺を建立しました。城の西にあたり、

朝日を最初に受ける春安を藩主の菩提や祈願に相応しい聖地としたのでしょう。天神神社は古くから春安の天神さんと親しまれ賑わいを見せています。

5、下広瀬（しもびろせ）

揖保川中流右岸の平野部で、北方に中広瀬があります。広瀬の地名は、揖保川の瀬の広い流れによるものと考えられます。水田中に条里の遺構が見られますが、揖保川の氾濫により大きく攪乱されています。広瀬は篠ノ丸城主の宇野氏の館跡があった場所と考えられ、北の中広瀬を含むあたりを広瀬郷といい、山崎の旧名です。

6、船元（ふなもと）

揖保川中流域西岸の平野部。近世は船本村と記されていました。慶安年間（一六四八～一六五二）には揖保川の渡し場が置かれ、藩主の参勤交代に利用され、家臣が控える下座場がありました。一雲寺（大雲寺の末寺）と長谷川孫兵衛銘の喚鐘が残されています。

7、野（の）

揖保川中流域西岸。『山崎町史』によると中世の野村郷があったことが記されています。

8、千本屋（せんぼんや）

揖保川と菅野川の合流する地点付近。城下村の役場が置かれました。水田には条里制の遺構が認められます。地内北東部の雨乞神社（貴船神社）の北隣には奈良期の創建と考えられる千本屋廃寺跡があります。千本は何を意味するのか不詳です。古代寺院や古社の仏具や神具に関わるものでしょうか。

9、御名（ごみょう）

揖保川と菅野川の合流点付近。古くは五明、中世には五ミやうとの記述があります。名田の呼び名によるものと思われます。明治になり、西部を南北に走る新道が建設され、主要交通路となりました。

10、金谷（かなや）

古くは金屋ともあります。国見山麓の段丘面と段丘下の河川灌漑地に分かれています。城下平野を一望できる高台に金谷山部古墳（県指定）があり、また金谷群集墳として五基の後期古墳が確認されています。当地には古くから鋳物を作る技術をもった長谷川姓を名乗る鋳物師がいて、記銘入りの梵鐘が各地に数多く残されています。

比地村（ひじむら）

江戸期の村名。延宝七年（一六七九）に上・中・下の三か村に分けられ、庄屋・年寄りが各村に置かれました。比治は、播磨国風土記に播磨国宍粟郡（しさわのこおり）の七里と一つとして「比治の里」と見え、七世紀中ごろ揖保郡より分かれ、宍禾郡（しさわのこおり）が出来たときに、山部比治が里長に任じられ、この人の名によって比治の里と名付けたという。現在の上比地、中比地、下比地、川戸、宇原、平見、金谷を含む地域に比定されています。土地柄は中の上とあります。比地は泥や湿原地を意味するもので、県内では朝来市和田山町比治も同じ意味で比治の地名が残されています。

11、上比地（かみひじ）

比地三か村の上手に位置します。国見の森公園周辺。比地の滝は古くから行者の修行場で播磨の名所として知られていました。ここから峠を越して新宮町奥小屋、牧に通ずる生活道が三本ありました。

12、中比地（なかひじ）

比地三か村の中央に位置しています。圃場整備で消滅しましたが、低平地には条里制の遺構の市ノ坪という遺称が残っています。

13、下比地（しもひじ）

比地三か村のうち南（下）方にあります。地内南部の郡境（市境）に「比地保キ（ひじがほき）」という小字が残り揖保川の蛇行で生じたヘアピンカーブの交通の難所があります

古写真２　中井付近の田園

この写真は、現在の咲ランドの西入口あたりから西に向かって撮られています。小学校の南下の田んぼと段方面の山並みが見えます。田んぼには今では目にすることがない「つぼき」（脱穀した後のわらを積み上げたもの）が写っています。

移りゆく地域の中で、大切に伝えたい地名という小さな文化財

城下地区に想いを馳せると、山崎小学校の南の崖下の広い田んぼ一面にピンク色のレンゲソウが咲いていたこと、その畦で田鮒や鯰を沢山捕まえてバケツに入れて持ち帰ったこと、遠藤坂でバスが横転しているのを目撃したこと。小学のクラス全員で国見山に登ったこと、比地の滝の遠足で、滝に打たれている白装束の人を見たこと、比地保きで「ぎぎ」という魚が入れ食い状態で日が暮れるのも忘れて、親に心配をかけ叱られたこと等々を思い出しました。

今や昭和の原風景は追憶でしか見られませんが、山河や地名は変わらず残っています。特に土地の小区間に名付けられた小字から土地の様子や成り立ちを読み取れるものが数多くあります。城下地区には条里制を意味する坪という小字がしばしば出てきました。また、比地保キという小字のホキは、崖を意味します。川の流水が衝突してできる川崖に多く名付けられています。このように、土地の成り立ちや、災害・危険地名として残されてきました。地名は小さな文化財といえるゆえんです。地名から先人達がどのような場所に住んでいたのか、未来の居住者へのメッセージと感じ取ることができます。常日頃から住んでいる地域の地名に関心を持つことが地域の歴史を知る近道かと感じています。そうして地名を大切に後世に伝えていきたいものです。

参考文書　『山崎町史』、『角川日本地名大辞典』、『門徒の地名』西川博敏氏著、『兵庫県小字名集　西播磨編』

山崎闇斎先生の神道について

髙井　淳

はじめに

山崎闇斎先生（一六一八～一六八二、以後先生という）は祖父が山崎出身の江戸時代の儒者であり、神道家でもあります。山崎郷土会報一三九号では、先生と山崎村や祖父、父そして主家である木下家との関係を、また一四〇号では江戸での保科正之との有機的な関係を述べさせて頂きました。これらは、この地域の私たちの最も関心のある事であり、それらをお伝えしたかったからです。

今回は先生の神道研究のことについて、書かせていただきたいと思います。それは、なぜ先生が儒学だけでなく神道の研究をするようになったのか、さらになぜ垂加（すいか）神道を創設することになったのかを知りたいと思うからです。

山崎家の家風

『山崎家譜』によると、祖父浄泉は古筆の「三社託宣」一幅を大切に蔵して、朝夕これを誦し、もし子ども等がこれに触れようとすると叱ったといいます。また先生の母は、ある夜、比叡山の社に詣で、老翁より梅の花の一枝を与えられてこれを左の袖に納めたという夢を見て、先生を身ごもったとあります。先生の生まれた家には、このように神を敬う風がありました。しかしこれらのことをもって直ちに後年の神道思想に結びつけることは出来ません。いくたびもの思想の展開、つまり仏教や儒教との関りというを体験しなければなりませんでした。

闇斎先生は儒学者であり神道家でした

先生は垂加神道の創設者です。垂加神道とは寛文十一年（一六七一）吉川惟足に「垂加霊社」号を授けられ、始めたものです。

先生は寛文五年（一六六五）保科正之の賓師となります。正之が先生に期待したものは、その学力識見でしたが、それにみごとに応えました。先生の識見ということでいうと、現代の儒学の泰斗加地伸行先生は平成二十四年（二〇一二）十一月四日の山崎闇斎研究会主催の講演会で闇斎先生の知識の奥深さを「カメラアイ」と例えられました。それほど読んだ書物の中身を一字一句、頭の中に焼き付けていたという事でした。

正之は、神道への志向を深くしていたので、先生にもこれを勧めました。先生自身も前年、正之の家臣服部安休（やすよし）との神道の論争を通じて自分の学力不足を自覚していました。また明暦のころから日本の歴史についての研究を進めていました。

闇斎先生の神道研究について

先生の儒教と神道に対する究明の仕方は精力的で徹底していて、その両者がはっきりと区別され、混同されてはいませんでした。ここでは先生が研究した神道についての代表的な書物や著した文を紹介していきます。

一「伊勢太神宮儀式序（いせのおおかみのみやぎしきじょ）」を書く

先生は明暦元年（一六五五）「伊勢太神宮儀式序」を書いています。『伊勢太神宮儀式』は伊勢神宮に関する最も古い記録とされている貴重書で、延暦二十三年（八〇四）に内宮と外宮の神官たちがそれぞれに神祇官に提出した文章を

一つにまとめたものです。先生にとって神道に係わる最初の文です。その序文に「神とは何か」という問題から説き起こしています。

神が神であるということを突き詰めて考えると、最初から「神」という名称や文字があったわけではない。かすかで知ることのできないものが、陰陽・五行の中心となり、そこからあらゆる事物が生まれ、あらゆる現象が起きた。だから、人々の間で、自然に声が挙がることになり、その結果、「神」という名称や文字が生まれた。

先生はこのように「神とは何か」を説明した後「神」とのちに呼ばれる根源的な何かから万物が生じた過程を『日本書紀』神代巻に見える神々の系譜に基づいて説明します。朱子学の理気論に基づく宇宙論の展開に従った解釈で日本の神道の根本原理を説明しました。

そして「ああ、神は垂に祈祷をもって先となし、冥は加に正直をもって本となせり。（嗚呼神垂以祈祷為先、冥加以正直為本）」と、その後研究を深くする『倭姫命世記』にある文章を用いて結んでいます。それが「垂加霊社」号の典拠でもありました。これは、「祈りをまっ先に捧げることにより、神の恵みがくだる。正直を根本としてこそ、目に見えぬ神の守りが加えられる」という意味です。

二『倭鑑』の執筆　先生はまた、同じころから日本の歴史書である『倭鑑』執筆に取り組んでいます。そのなかで、明暦三年（一六五七）、藤森神社を訪ねて祭られている舎人親王を表敬しました。『日本書紀』の編者で広い知識を持ち資料をもらさず記している舎人親王のことを、敬っていました。『倭鑑』は完成しませんでしたが「神代巻」の研究によって、神話とされているものに深い意味がこめられていることを理解しました。寛文十一年には同社の神主春原秋成からの委嘱で『藤森弓兵政所記』を著しますが、舎人親王を主祭神とした神社と結論づけています。

三『大和小学』を著す　万治元年（一六五八）『大和小学』を著します。これは儒教の実践書として分りやすく和文で書かれたものです。先生は啓蒙書の出版においても先駆的な役割を果たしていました。その中には「神道五部書」や『神皇正統記』が引かれており、神社の記述も多く、神道並びに我が国の歴史への研鑽の並々でなかったことを示しています。

四『神代巻口訣』の校刊　寛文四年（一六六四）には忌部正通『神代巻口訣』の校刊をしました。『神代巻口訣』は忌部神道において最も基本とすべきテキストであったので、忌部神道の奥義は先生に引き継がれることになったと考えてよいでしょう。そして、『神代巻口訣』のなかから「心神」とか「心祓」という概念を導き出しました。「心神」は魂魄のことであり、「心祓」は「身」に対する「心」の祓のことです。その後の『中臣祓』のヒントを掴んだと思われます。

五『倭姫命世記』の校訂　寛文六年には『倭姫命世記』の校訂（誤りを正す）をしています。ここで「伊勢太神宮儀式序」の結びに『倭姫命世記』からの引用がされていたことから、その当時から研究を進めていたと考えられます。

『倭姫命世記』は伊勢神道では「神道五部書」の一つとして中世から近世にかけての伊勢神道の発展における重要文献とされていますが、江戸時代初期には伊勢神宮ではすでに失われてしまっている

幻の史料でした。伊勢神道の中興の祖とされた度会延佳（わたらいのぶよし）が京都でその古書を発見するのが寛文九年（一六六九）ですが先生の仲介ではないかと推測されています。同九年に度会延佳の弟子の大中臣精長（きよなが）から伊勢神道系の『中臣祓』を伝授されています。延佳からは『祓具図説』といった儀式に関わる秘物を記した書物も贈られています。

また、その閏十月に服部安休を介して、吉田神道系の『中臣祓』を入手しています。そして同十一年冬に吉川惟足から「垂加霊社」の号を授けられた際に吉田神道に関する説明を受けたと推測されています。

先生は忌部神道、伊勢神道、吉田神道の『中臣祓』を入手し、それぞれを比較し研究を進めることができました。『中臣祓』に関する著作である『中臣祓風水草（ふうすいそう）』にまとめられています。

「神代巻」については『神代巻風葉集（ふうようしゅう）』にまとめられました。

下御霊神社

垂加社（猿田彦社の相殿）

おわりに

山崎闇斎先生は明暦三年（一六五七）から寛文九年までの記録では六度伊勢神宮に参詣しています。また、塾を開いた頃から亡くなる天和二年（一六八二）までの約三十年、儒学の崎門学派としての研究と並行しながら、多くの神道関係の諸資料を精力的に調べ、それらを校訂するといった基礎的な作業を行ない、神道の研究を続け、垂加神道をつくりあげました。先生の霊璽（れいじ）（死者の霊魂が宿るところ）は現在、京都市中京区にある下御霊神社内の「猿田彦社」に相殿として祀られています。

兵庫県宍粟市山崎町には昭和十五年（一九四〇）創建の山崎闇斎神社があります。ここには、「垂加霊社」から分霊をうけて、山崎闇斎先生をお祀りしています。

最後に、この小論について、山崎闇斎研究会顧問の鎌田裕明氏に貴重なアドバイス等を頂きました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

澤井啓一　『山崎闇斎』ミネルバ書房　平成二十六年三月十日
牛尾弘孝　『山崎闇斎』山崎町教育委員会　平成十七年三月三十一日
近藤啓吾　『山崎闇斎の研究』神道史学会　昭和六十一年七月二十日
近藤啓吾　『続山崎闇斎の研究』神道史学会　平成三年二月二十日
村岡典嗣校訂　『垂加翁神説・垂加神道初重伝』岩波文庫　平成二十二年二月二十三日

会員・家族の文芸

◎冠　句（つた・いさわ・加生・山崎冠句会）

ライセンス　重ねた努力　花ひらく　宇田　幸夫
旅をする　ツバメの帰省　はるばると　宇田　幸夫
ライセンス　苦労重ねて　得た資格　坂本　忠彦
旅をする　一人に余る　荷を負いて　坂本　忠彦
ライセンス　運転免許　これだけは　実友　勉
旅をする　友と笑顔の　コロナ明け　実友　勉
ライセンス　いつ迄乗れる　マイカーに　嶋津　千里
旅をする　夢二の世界　追い求め　嶋津　千里
ライセンス　空飛ぶ車　安全に　為国真佐行
旅をする　桜を追って　北上し　為国真佐行
ライセンス　自分の重さ　一歩増す　谷笹　まや
旅をする　長き道のり　百までも　谷笹　まや
ライセンス　たゆまぬ努力　惜しまずに　高井　玲依
旅をする　人生航路　楽しみて　高井　玲依
ライセンス　何が良いかと　思案する　西家　侑希
旅をする　道中のミスも　楽しんで　西家　侑希
ライセンス　還暦過ぎて　希望持つ　三木ひづる
旅をする　癒しの時間　楽しんで　三木ひづる
ライセンス　あると変わる　周りの目　飯塚　正浩
旅をする　行き先決めて　想い馳せ　飯塚　正浩
ライセンス　役に立つ日が　きっと来る　大谷　志路
旅をする　いつもと違う　目覚め時　大谷　志路
ライセンス　持って人生　守り抜く　中瀬　公三
旅をする　九州熊本　行ってみたい　中瀬　公三

◎俳　句

摩利支天憤怒のお貌花の冷え　京屋　伊助
足萎（な）えの耳に遠田（とほだ）の蛙（かはづ）かな　京屋　伊助
ひとときを堂縁に座し春惜しむ　杉山美保子
大山の山容映す植田かな　杉山美保子
明け易しはや観音堂に鈴のなる　田中　良子
蜩や女人歌才の石山寺　田中　良子
藤房の揺れて紫匂ひ来る　鳥羽チエノ
開け放す座敷ひと翔び夏燕　鳥羽チエノ
昼顔や呼びに来し子も母も笑み　三浦　ゆき
子に跳べて母には跳べぬ田螺かな　三浦　ゆき
食卓に一汁二菜朝桜　里見　和樽
城山の姿を映し植田澄む　里見　和樽
梅雨晴間児の声弾む母校跡　髙井　智代
在来種の豆飯供ふ母遠忌　髙井　智代
ほたる火や自然の中に別世界　速水美知代
ふる里の過疎も人の世蝉しぐれ　速水美知代
無住寺や結界めいて百日紅　宗平　圭司
風鈴は佳き雑音よ一人の居　宗平　圭司

＊次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
併せて新会員を募集しています

令和五・六年度役員名簿

役職名	氏名	役職名	氏名
会長	大谷 司郎	菅野支部	浅田 雅昭
副会長	志水 豊章	土万支部	森田 且元
事務局長	廣居 克彦	監事	浅田 茂樹
会報部長	大谷 司郎	監事	里見 亘
研修部長	坂本 忠彦	各部構成	
史跡部長	伊野 操治	会報部長(代行)	大谷 司郎
山崎西一支部	竹内 克司	会報部員	片山 昭悟
山崎西二支部	髙井 淳	会報部員	志水 豊章
山崎東支部	山本 美浩	会報部員	竹内 克司
山崎北支部	伊野 操治	会報部員	髙井 淳
城下支部	片山 昭悟	研修部長	坂本 忠彦
戸原支部	田中 健三	研修部員	三木 一男
河東支部	宇野 正憲	研修部員	原 忠雄
神野支部	上田 泰三	研修部員	玉野 廣實
蔦沢支部	矢野 賢一	史跡部長	伊野 操治

◇事務局だより

本会役員の承認　令和五年四月十六日防災センターにおいて令和五年度本会総会を開催しました。上記役員が承認されましたのでよろしくお願いします。

会報広告の拡大　従前は八社の広告を裏表紙に掲載しておりましたが、今回からは倍増して十六社の広告を掲載させていただきます。新たにご協力いただいた九社に対し、深く感謝申し上げます。これを機にさらなる会報の充実を図っていきたいと存じます。

会報部長の交代　長らく本会の会報部長として、歴史ある「郷土会報」の編集に携わってきた片山昭悟氏が部長を引かれました。部員としては残ってもらいます。後任者が決まらず、当分の間大谷司郎が努めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

◇編集後記

会報一四一号が発行できて有難く思います。五人の会員が郷土史や地域文化に熱い思いをもって寄稿していただきました。是非ご意見などお聞かせください。今後も多くの会員様のご寄稿をお待ちしています。

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90　〒671-2577
TEL(0790)62-0700㈹　FAX(0790)62-0700

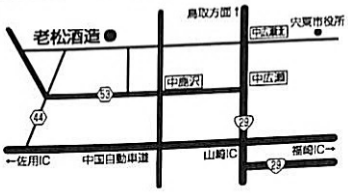
E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/

老松酒造有限会社

■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日:木曜日(予約優先)

■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます



〒671−2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790−62−2345

まごころを伝えます。

一献献上　品質本位
地酒
一献 播州

山陽盃 醸造
確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

●相続手続時、名義変更に関するアドバイス
●各種税務手続き
相続税・贈与税確定申告手続　電子申告環境サポート
所得税確定申告
●経理自計化のお手伝い
●法人税・地方税・申告書作成代行
●経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7
高橋利典税理士事務所
税理士・行政書士　高　橋　利　典
TEL(0790)63-2150／FAX(0790)63-0445

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〒671−2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62−0254 FAX(0790)62−4764

ひとりひとりに応えたい
収納家具のSmart Factory
fujii 株式会社フジイ

〒671-2507　兵庫県宍粟市山崎町下牧谷57-1
TEL.0790-64-7520　FAX.0790-64-7521
URL　: https://www.f-gallery88.jp/
E-mail : info@f-gallery88.jp

ほっと、ひといき
伊沢の里

●各種宴会　祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
●宿泊　観光、ビジネス　帰省
●日帰り入浴　露天風呂、サウナ
●レストラン　御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214−1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

地域で最も信用、
信頼される金融機関をめざして

西兵庫信用金庫

本店営業部　宍粟市山崎町山崎190
TEL　0790-62-2020
https://www.shinkin.co.jp/nisisin/

株式会社長田ＧＨ
NAGATA GROUP HOLDINGS

- 長田産業株式会社　小麦澱粉、小麦蛋白、酵素製造販売、受託加工
  - エイチビィアイ株式会社　食品用酵素各種製造
  - サン工業株式会社　焙煎小麦粉、焙煎胚芽、焙煎麩、粘度
  - 西兵庫トランスポート株式会社　運送業務
- 姫路糧食株式会社　小麦粉卸、その他食品材料販売
- 株式会社長田一宮　焼麩製造

UEBAYASHI

つくるでつなぐ

上林建設株式会社

〒671-2554 兵庫県宍粟市山崎町御名226番地1
TEL.0790-62-2828　FAX.0790-62-7186

株式会社谷笹化成工業所

〒671−2576 兵庫県宍粟市山崎町東下野137−1
TEL0790-65-0157 FAX0790-65-0636
ホームページ / http://www.tanisasa.com/

国土交通省優良認定タイヤ整備工場
認定番号 近運特210

ミスター タイヤマンタケダ

宍粟市山崎町今宿88−3
TEL (0790) 62−1859
FAX (0790) 62−1860

各種新車・中古車・介護車輌販売　リース　車買取
民間車検　整備　鈑金・塗装　ボディコート　ETC

☺ まごころサービス ☺

光徳自動車販売株式会社

〒671-2542 兵庫県宍粟市山崎町船元242
TEL (0790) 62−1780
FAX (0790) 62−2779
E-mail:koutoku@gol.com

宍粟市山崎町山崎264
（中央通り商店街）

菓子処 こうやま

☎0790-62-0216

Fish Shop
KITAGAWA

有限会社 北川

旬鮮魚介 仕出し

〒671-2572　宍粟市山崎町庄能131-12
TEL (0790)62-0179・FAX (0790)62-0319